

「神は真実な方である」

2018年08月31日

ローマの信徒への手紙 3章1節～8節 では、ユダヤ人の優れた点は何か。割礼の利益は何か。それはあらゆる面からいろいろ指摘できます。まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです。それはいったいどういうことか。彼らの中に不誠実な者たちがいたにせよ、その不誠実のせいで、神の誠実が無にされるとでもいうのですか。決してそうではない。人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるべきです。「あなたは、言葉を述べる時、正しいとされ、／裁きを受けるとき、勝利を得られる」と書いてあるとおりです。しかし、わたしたちの不義が神の義を明らかにするとしたら、それに対して何と仰うべきでしょう。人間の論法に従って言いますが、怒りを発する神は正しくないのですか。決してそうではない。もしそうだとしたら、どうして神は世をお裁きになることができましょう。またもし、わたしの偽りによって神の真実がいつそう明らかにされて、神の栄光となるのであれば、なぜ、わたしはなおも罪人として裁かれねばならないのでしょうか。それに、もしそうであれば、「善が生じるために悪をしよう」とも言えるのではないのでしょうか。わたしたちがこう主張していると中傷する人々がありますが、こういう者たちが罰を受けるのは当然です。

ユダヤ人は神の民の徴である割礼を受け、そして、神の掟である律法を与えられた。しかし、割礼を受けていながら、律法を破り、神の名が異邦人の間で侮られている。パウロは、ユダヤ人の不信心と不義について指摘した。すると、ユダヤ人であるパウロに、「では、ユダヤ人の優れた点は何か、割礼の利益は何か」という問いが突き付けられてくる。それに対し、パウロは色々な面で指摘できるが、「まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです」と言う。優れた点は神の言葉を委ねられたことで、真実な神の前に立つのがユダヤ人である。ユダヤ人の中に不誠実な者たちがいても、人間の不誠実のせいで、神の誠実が無にされることはあり得ない。「人はすべて偽り者であるとしても、神は真実な方であるべきです。」ユダヤ人がどんなに不信心で、不義であろうとも、神の言葉がユダヤ人に委ねられ、神のユダヤ人に対する誠実が失われることはない。これが、パウロの神への揺るぎない信頼であった。

次にパウロは、詩編 51 編 6 節の言葉から、「あなたは、言葉を述べる時、正しいとされ、／裁きを受けるとき、勝利を得られる」と引用し、罪を犯し、悪事をしたことに対する神の裁きは正しいと言う。しかし、私たちの不義によって神の義が明らかになるとしたら、言い様なく残念である。ユダヤ人の論法では、選ばれたユダヤ人に怒りを発する神は正しくないということになるが、パウロは、「決してそうではない」と言い、もしそうだとしたら、神は世を裁くことができなくなってしまう。また同時にもし、私の偽りによって神の真実がいつそう明らかにされて、神の栄光となるのであれば、私はなおも罪人として裁かれねばならないでしょう。そうであるならば、「善が生じるために悪をしよう」と言うことになる。パウロの宣教は、人間の罪を指摘し、そこに神の正しい裁きがあることを解き明かした。それを聞いて、神の裁きの正当性のために人間の罪を弾劾するならば、神の義を浮き出させるために「大いに罪を犯し続けよう」と中傷する人々がいる。パウロはとんでもない誤解で、「こういう人たちが罰を受けるのは当然である」と言う。神の真実は人間の不義に関わりなく、貫かれると力説している。